

サーキット・ライダー 2002年 6月号

休暇：静養の勧め

それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に寄せ、向こう岸に行かせ、その間に群集を解散させられた。群集を解散させてから、祈るためにひとり山にお登りになった。夕方になっても、ただひとりそこにおられた。

マタイ 14：22－23。

4月に休暇を取り日本に2週間弱帰国しましたが、この場をお借りしまして改めてその折の事をお礼申し上げます。特に留守中教会を守って下さった教会員の皆様、礼拝で説教を取り次いで下さいました水野二郎牧師、木戸ブライアン牧師に心より感謝いたします。また日本でも多くの方々のお世話になりましたことも重ね重ね感謝いたします。

いつになく復活祭が早く終わり4月に休暇を取る事ができましたお陰で、今回の帰国ではそれまで1度も参加したことのなかった高校の同窓会（なんと卒業してから25年経ってしまいました）に出席し、アメリカの教育、文化、牧師の仕事、9月11日の事件とその後等について1時間の講演をさせていただいたり、懐かしい高校時のフォーク・ソング・クラブの仲間と共に同窓会の席上で60年代、70年代のアメリカン・フォークに最近の日本の歌なども交えて大声で歌い実には楽しい時を持ちました。また、日本キリスト教団の教団本部オフィスやNCC(National Council of Churches)のオフィス、皆様にいつも古切手をお送り頂いている日本キリスト教海外医療協力会(JOCS)にも訪問できました。帰国した教会員の家を訪ねたり、お世話になっている方にお会いしてコロンビア・ティーチャーズ・カレッジの博士課程合格を報告したり、、と実に恵まれた時をもちました。

話はアメリカ東部の近況になりますが、つい昨日、ニューヨークのグラウンド・ゼロの掘り起こし、復旧作業の終了式がありました。昨年のテロによる爆破以来、多くの方が犠牲となり、家族や友人を始め数え切れない人々が悲しみ苦しみの日々を過ごしてきましたが、これを機に新たな歩みを始めていただければと心から願うばかりです。私も、何度か個人的に、またこの場をお借りして、自分の思いを吐露してきましたが、牧師として、友人として犠牲者の遺族に接したり、教会でアフガニスタンへの爆撃反対表明をしたりする中で、心晴れず、時に説教ができない思いにかられました。日頃から主イエスの愛、平和、正義を説いているのに、いざ戦いとなったら、多くの人々がそれを支持していることに矛盾を感じて、、、

しかし、休暇（一時帰国）が諸々の悩みを全て忘れさせてくれました。あまりにも単純な事実ですが、人間、やはり休みが必要なのだとつくづく思いました。勿論、平常時でも休みの日はあります（土曜日は聖日礼拝の準備やミーティングに費やされ、日曜日は朝も午後も礼拝でお仕えするので私は月曜日に休みを取っています。）が、牧師と言う仕事柄、休みの日に信者が入院していると病院を訪問したり、信徒が困っていると家に出向いて行ったり、休みで私が家にいるとばかりに電話があつたりと結構、丸々1日何もない日はありません。勿論、働いている方、家庭を持っている方は、皆条件は同じでしょうから、贅沢なことは言っ

てはいけないのですが、、誰でもやはり休みは必要です。心と体のバランスを取るためにも。休暇中、独りぼっちということはありませんでしたが、仕事のこと、アメリカでの出来事、事件などはきれいさっぱり忘れて、再会や諸々の行動を楽しむことができました。お陰ですっかりリフレッシュして、精神的にも靈的にもかなり解放され、内側から新たな力が沸き上がり、こちらに帰ってきました。今は元気一杯で、この元気を皆様にもお分けしたいほどです(笑)。

冒頭の引用はマタイによる福音書14章からのものですが、前章から読んで見ますと、イエスが絶えず弟子たち、群集たちと共にいて、教えを宣べ伝え、奇跡を行い、病人を癒し、、と、休みなく働き続けていたことが伺えます。またイエスが尊敬していた預言者ヨハネがヘロデ王によって殺されたことを聞いて、一人で人里離れた所に退かれたとも書かれています。そこでも群集がイエスを放っておかずに後を追ひ、ついて来たので、イエスはその飢えた五千人の人々にパンと魚を分け与えるという奇跡を行っています。「それからすぐ」弟子たちを強いて先に行かせ、群集を解散させ、一人になって祈るために山に登られました。イエスにも一人になる時間、祈りの時、リフレッシュの時(＝休暇、静養の時)が必要だったのです。

働き者の皆様、いかがお過ごしですか？体の静養のみならず、心の、魂の静養を取っていらっしゃいますか？6月後半からアメリカの一般の学校は夏休みになります。大学は5月中旬から既に休みですが、皆さんはこの夏どのような御計画をお立てでしょうか。遊ぶことも、何もしないでリラックスすることも、仕事と同じ位、或いは勉強と同じ位必要です。どうぞ心と体のケアをお忘れなく。

吉松 純